
地方自治体の業務プロセス・情報システムの 非機能要件の標準(標準非機能要件)

令和2年●月

内閣官房 情報通信技術(IT)総合戦略室
総務省自治行政局行政経営支援室
地域情報政策室

「標準非機能要件」について

「標準非機能要件」は、「非機能要求グレード(地方公共団体版)」(平成26年3月・JLIS作成(※))において、業務・システムの分類「グループ②」として示された要求グレードのうち、クラウド調達時の扱いが「○:クラウドの対象と成り得る項目」とされている項目の「選択レベル」を基準として、最新の状況等を鑑み修正をしたものである。

※ JLISが、IPAが作成した「非機能要求グレード2013年4月版」を基に、地方公共団体が業務システムを調達する際に、業務システムに共通する非機能要件として一部を改変したもの。

1. 「標準非機能要件」を用いる業務システム

・ 新経済・財政再生計画改革工程表2019」(令和元年12月19日)及び「デジタルガバメント実行計画」(令和元年12月20日閣議決定)において、地方公共団体の業務プロセス・情報システムの標準化を検討する対象とされた17業務(※)に係る、市町村が使用するシステム。

※ 住民基本台帳、選挙人名簿管理、固定資産税、個人住民税、法人住民税、軽自動車税、国民健康保険、国民年金、障害者福祉、後期高齢者医療、介護保険、児童手当、生活保護、健康管理、就学、児童扶養手当、子ども子育て支援。

2. 「標準非機能要件」の利用方法

○各開発ベンダ

・ 「標準非機能要件」に従って、クラウドサービスによりシステムを提供する。
・ 「標準非機能要件」の各項目の選択レベルを下げたものが一つでもあれば、「標準非機能要件」を満たしているものとはしない。

○各市町村

・ 上記17業務に係る情報システム調達の際に、開発ベンダに対して示す非機能要件は、「標準非機能要件」とする。
・ なお、次に示す非機能要件は「標準非機能要件」が示す要件に従って、各市町村の業務量に応じて各市町村が具体的な値を示すこととする。
「B.1.1.1 ユーザ数」、「B.1.1.2 同時アクセス数」、「B.1.1.3 データ量(項目・件数)」、「B.1.1.4 オンラインリクエスト件数」、「B.1.1.5 バッチ処理件数」

3. 上記17業務に係る各業務システムの標準仕様と「標準非機能要件」の関係

・ 各業務システムの標準仕様において、非機能要件に関して独自の厳しい要件を定めた場合には、当該標準仕様の非機能要件部分が、「標準非機能要件」に優先するものとする。

「標準非機能要件」の使用方法について

- ・「標準非機能要件」の活用シートでは、調達時に定めるべき非機能要件の項目を示しており、項目ごとにあり得るレベル(レベル0から5)を示している。
- ・各開発ベンダ・市町村が調達を行う際には、各項目について「選択時の条件」における「選択レベル」として示されたレベルを使用する。

例) 項番C.1.2.2「運用・保守性」(通常運用)の「外部データの利用可否」については、選択レベル2「システムの復旧に外部データを活用できない」を使用する。
 項番C.2.3.5「運用保守性」(保守運用)の「OS等パッチ4適用タイミング」については、選択レベル4「緊急性の高いパッチは即時に適用し、それ以外は定期保守時に適用を行う」を使用する。

利用ガイドは、「非機能要求グレード(地方公共団体版)利用ガイド」(平成26年3月・JLIS作成)のことを指す。

項番	大項目	中項目	メトリクス(指標)	メトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ²	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと				
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5			
C.1.2.2	運用・保守性	通常運用	外部データの利用可否	外部データによりシステムのデータが復旧可能かどうか確認するための項目。外部データとは、当該システムの範囲外に存在する情報システムの保有するデータを指す(例:住民基本4情報については、住基ネットの情報がある等)。	○		2	システムの復旧に外部データを利用できない [-] 外部に同じデータを持つ情報システムが存在するため、本システムに障害が発生した際には、そこからデータを持ってきて情報システムを復旧できるような場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	外部データによりシステムの全データが復旧可能	外部データによりシステムの一部のデータが復旧可能	システムの復旧に外部データを利用できない							【注意事項】 外部データによりシステムのデータが復旧可能な場合、システムにおいてバックアップ設計を行う必要性が減るため、検討の優先度やレベルを下げて考えることができる。
C.2.3.5	運用・保守性	保守運用	OS等パッチ4適用タイミング	OS等パッチ情報の展開とパッチ適用のポリシーに関する項目。OS等は、OS、ミドルウェア、その他のソフトウェアを指す。脆弱性に対するセキュリティパッチなどの緊急性の高いものは即座に適用する。	○	P29	4	緊急性の高いパッチは即時に適用し、それ以外は定期保守時に適用を行う [-]外部と接続することが全くない等の理由で緊急対応の必要性が少ない場合(リスクの確認がとれている場合)。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	パッチを適用しない	障害発生時にパッチ適用を行う	定期保守時にパッチ適用を行う	緊急性の高いパッチのみ即時に適用を行う	緊急性の高いパッチは即時に適用し、それ以外は定期保守時に適用を行う	新規のパッチがリリースされるたびに適用を行う				【注意事項】 リリースされるパッチの種類(個別パッチ/集合パッチ)によって選択レベルが変わる場合がある。セキュリティパッチについては、セキュリティの項目でも検討すること(E.4.3.3)。

各開発ベンダ・市町村が調達を行う際に使用する非機能要件のレベル

[-]は、選択レベルを1つ下げる場合の条件

項番	大項目	中項目	マトリクス(指標)	マトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと					
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5				
C.1.2.2	運用・保守性	通常運用	外部データの利用可否	外部データによりシステムのデータが復旧可能かどうか確認するための項目。 外部データとは、当該システムの範囲外に存在する情報システムの保有するデータを指す(例:住民基本4情報については、住基ネットの情報がある等)。	○		2	外部データは利用できない システムの復旧に外部データを利用できない	全データを復旧するためのバックアップ方式を検討しなければならないことを想定。 [-] 外部に同じデータを持つ情報システムが存在するため、本システムに障害が発生した際には、そこからデータを持ってきて情報システムを復旧できるような場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	全データの復旧に利用できる 外部データによりシステムの全データが復旧可能	一部のデータ復旧に利用できる 外部データによりシステムの一部のデータが復旧可能	外部データは利用できない システムの復旧に外部データを利用できない							【注意事項】 外部データによりシステムのデータが復旧可能な場合、システムにおいてバックアップ設計を行う必要性が減るため、検討の優先度やレベルを下げて考えることができる。
C.2.3.5	運用・保守性	保守運用	OS等バッチ4適用タイミング	OS等バッチ情報の展開とバッチ適用のポリシーに関する項目。 OS等は、OS、ミドルウェア、その他のソフトウェアを指す。 脆弱性に対するセキュリティバッチなどの緊急性の高いものは即座に適用する。	○	P29	4	緊急性の高いバッチは即時に適用し、それ以外は定期保守時に適用を行う	緊急性の高いバッチを除くと、定期保守時にバッチを適用するのが一般的と想定。 [-]外部と接続することが全くない等の理由で緊急対応の必要性が少ない場合(リスクの確認がとれている場合)。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	バッチを適用しない	障害発生時にバッチ適用を行う	定期保守時にバッチ適用を行う	緊急性の高いバッチのみ即時に適用を行う	緊急性の高いバッチは即時に適用し、それ以外は定期保守時に適用を行う	新規のバッチがリリースされるたびに適用を行う				【注意事項】 リリースされるバッチの種類(個別バッチ/集合バッチ)によって選択レベルが変わる場合がある。 セキュリティバッチについては、セキュリティの項目でも検討すること(E.4.3.3)。
E.1.1.1	セキュリティ	前提条件・制約条件	順守すべき規程、ルール、法令、ガイドライン等の有無	ユーザが順守すべき情報セキュリティに関する規程やルール、法令、ガイドライン等が存在するかどうかを確認するための項目。 なお、順守すべき規程等が存在する場合は、規定されている内容と矛盾が生じないよう対策を検討する。 (例) ・地方公共団体における情報セキュリティポリシーに関するガイドライン(総務省) ・国内/海外の法律 ・資格認証 ・ガイドライン ・その他ルール ・情報セキュリティポリシー ・個人情報保護法 ・電子署名法 ・IT基本法 ・ISO/IEC27000系 ・政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準 ・プライバシーマーク など	○		1	有り	セキュリティポリシー等を順守する必要があることを想定。 [-] 順守すべき規程やルール、法令、ガイドライン等が無い場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	有り								【注意事項】 規程やルール、法令、ガイドライン等を確認し、それらに従い、セキュリティに関する非機能要求項目のレベルを決定する必要がある。
E.2.1.1	セキュリティ	セキュリティリスク分析	リスク分析範囲	システム開発を実施する中で、どの範囲で対象システムの脅威を洗い出し、影響の分析を実施するかの方針を確認するための項目。 なお、適切な範囲を設定するためには、資産の洗い出しやデータのライフサイクルの確認等を行う必要がある。 また、洗い出した脅威に対して、対策する範囲を検討する。	○		1	重要度が高い資産を扱う範囲、あるいは、外接部分	重要情報が取り扱われているため、脅威が現実のものとなった場合のリスクも高い。そのため、重要度が高い資産を扱う範囲に対してリスク分析する必要がある。 [-] 重要情報の漏洩等の脅威が存在しない(あるいは許容する)場合 [+] 情報の移動や状態の変化が大きい場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	分析なし	重要度が高い資産を扱う範囲、あるいは、外接部分	開発範囲対象全体							【レベル1】 外接部分とは、インターネットへの接続部分や、外部へ情報を持ち出す際に用いる媒体等を接続する部分、また、外部システムとデータのやりとりを行う部分等を意味する。 なお、以降のレベルにおいても同様の意味で用いている。 重要度が高い資産は、各団体の情報セキュリティポリシーにおける重要度等に基づいて定める(重要度が最高位のものとする等)。

項番	大項目	中項目	メトリクス (指標)	メトリクス説明	クラウド 調達時 の扱い ¹	利用ガ イドの 解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと					
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5				
E.4.3.4	セキュリティ	セキュリティ リスク管理	ウイルス定義 ファイル適用 タイミング	対象システムの脆弱性等に対応するための ウイルス定義ファイル適用に関する適用範囲、 方針及び適用のタイミングを確認するための 項目。	○	P30	2	定義ファ イルリ リース時 に実施	ウイルス定義ファイルは、 ファイル が公開されるとシステムに自動的 に適用されることを想定。 [-]ウイルス定義ファイルが、自動的 に適用できない場合(例えばイン ターネットからファイル入手できない 場合)。	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	定義ファ イルを適用し ない	定期保守 時に実施	定義ファ イルリリース 時に実施							
E.5.1.1	セキュリティ	アクセス・利 用制限	管理権限を 持つ主体の 認証	資産を利用する主体(利用者や機器等)を識別 するための認証を実施するか、また、どの程度 実施するのかわかるための項目。 複数回の認証を実施することにより、抑止効果 を高めることができる。 なお、認証するための方式としては、ID/パス ワードによる認証や、ICカード認証、生体認証 等がある。	○	P31	1	1回	攻撃者が管理権限を手に入れること による、権限の乱用を防止するた めに、認証を実行する必要がある。 [+] 管理権限で実行可能な処理の 中に、業務上重要な処理が含まれ ている場合	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	実施しない	1回	複数回の 認証	複数回、 異なる方 式による 認証						【注意事項】 管理権限を持つ主体とは、情報システ ムの管理者や業務上の管理者を指す。
E.5.2.1	セキュリティ	アクセス・利 用制限	システム上 の 操作制限 ^度	認証された主体(利用者や機器など)に対し て、資産の利用等を、ソフトウェアにより制限す るか確認するための項目。 例) コマンド実行制 、ソフトウェアのインストール 制限や、利用制限等、ソフトウェアによる対策 を示す。	○		1	必要最小 限のプロ グラム の実行、 コマ ンドの 操作、 ファイ ルへの アクセ スのみ を許可	不正なソフトウェアがインストールさ れる、不要なアクセス経路(ポート 等)を利用可能にしている等によ り、情報漏洩の脅威が現実のもの となってしまうため、これらの情報 等への不要なアクセス方法を制限 する必要がある。 (操作を制限することにより利便性 や、可用性に影響する可能性がある)	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	無し	必要最小 限のプロ グラムの 実行、コ マンドの 操作、 ファイ ルへの アクセ スのみ を許可								
E.6.1.1	セキュリティ	データの秘 匿	伝送データの 暗号化の有 無	暗号化通信方式を使用して伝送データの暗号 化を行う。	○	P31	1	認証情報 のみ暗号 化	ネットワークを経由して送信するパ スワード等については第三者に漏 洩しないよう暗号化を実施する。 [+] 外部ネットワークと接続する場 合	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	無し	認証情報 のみ暗号 化	重要情報 を暗号化	すべての データを暗 号化					【レベル1】 認証情報のみ暗号化とは、情報システ ムで重要情報を取り扱うか否かに関わ らず、パスワード等の認証情報のみ暗 号化することを意味する。 【注意事項】 暗号化方式等は、国における評価の結 果をまとめた「電子政府における調達 のために参照すべき暗号のリスト (CRYPTREC暗号リスト)」を勘案して決 定する。 (CRYPTREC暗号リスト: http://www.cryptrec.go.jp/list.html)。	
E.6.1.2	セキュリティ	データの秘 匿	蓄積データの 暗号化の有 無	ファイル・フォルダを暗号化するソフトウェア や、データベースソフトウェアの暗号化機能を 使用して暗号化を行う。	○	P32	1	認証情報 のみ暗号 化	蓄積するパスワード等については 第三者に漏洩しないよう暗号化を 実施する。 [+]物理記録媒体の盗難・紛失の可 能性が有る場合	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	無し	認証情報 のみ暗号 化	重要情報 を暗号化						【レベル1】 認証情報のみ暗号化とは、情報システ ムで重要情報を取り扱うか否かに関わ らず、パスワード等の認証情報のみ暗 号化することを意味する。 【注意事項】 暗号化方式等は、国における評価の結 果をまとめた「電子政府における調達 のために参照すべき暗号のリスト (CRYPTREC暗号リスト)」を勘案して決 定する。 (CRYPTREC暗号リスト: http://www.cryptrec.go.jp/list.html)。	
E.7.1.1	セキュリティ	不正追跡・ 監視	ログの取得	不正を検知するために、監視のための記録(ロ グ)を取得するかどうかの項目。 なお、どのようなログを取得する必要があるか は、実現する情報システムやサービスに応じて 決定する必要がある。 また、ログを取得する場合には、不正監視対 象と併せて、取得したログのうち、確認する範 囲を定める必要がある。	○		1	必要な ログを取 得する	不正なアクセスが発生した際に、 「いつ」「誰が」「どこから」「何を 実行したか」等を確認し、その後の対 策を迅速に実施するために、ログを取 得する必要がある。 (ログ取得の処理を実行すること により、性能に影響する可能性がある)	仕様の対 象としない	ベンダーに よる提案 事項	取得しない	必要な ログを取 得する							【注意事項】 取得対象のログは、不正な操作等を検 出するための以下のようなものを意味 している。 ・ログイン/ログアウト履歴(成功/失敗) ・操作ログ 等	

項番	大項目	中項目	マトリクス(指標)	マトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹⁾	利用ガイドの解説 ²⁾	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと				
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5			
E.7.1.3	セキュリティ	不正追跡・監視	不正監視対象(装置)	サーバ、ストレージ等への不正アクセス等の監視のために、ログを取得する範囲を確認する。不正行為を検知するために実施する。	○		1	重要度が高い資産を扱う範囲、あるいは、外接部分	脅威が発生した際に、それらを検知し、その後の対策を迅速に実施するために、監視対象とするサーバ、ストレージ等の範囲を定めておく必要がある。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	重要度が高い資産を扱う範囲、あるいは、外接部分	システム全体						
E.10.1.1	セキュリティ	Web対策	セキュアコーディング、Webサーバの設定等による対策の強化	Webアプリケーション特有の脅威、脆弱性に関する対策を実施するかを確認するための項目。Webシステムが攻撃される事例が増加しており、Webシステムを構築する際には、セキュアコーディング、Webサーバの設定等による対策の実施を検討する必要がある。	○	P32	1	対策の強化 [-] Webアプリケーションを用いない場合	オープン系の情報システムにおいて、データベース等に格納されている重要情報の漏洩、利用者への成りすまし等の脅威に対抗するために、Webサーバに対する対策を実施する必要がある。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	対策の強化							【注意事項】 また、実施した結果の有効性を確認するための専門家のレビューやソースコード診断、ツールによるチェック等についても検討する必要がある。 詳細は、当センターの「地方公共団体における情報システムセキュリティ要求仕様モデルプラン」を参照の上、対策を検討すること。 Webシステムで考慮すべき項目。
E.10.1.2	セキュリティ	Web対策	WAFの導入の有無	Webアプリケーション特有の脅威、脆弱性に関する対策を実施するかを確認するための項目。WAFとは、Web Application Firewallのことである。	○	P33	0	無し [+] 外部ネットワークと接続する場合	内部ネットワークのみ接続する情報システムを想定。そのため、ネットワーク経由での攻撃に対する脅威が発生する可能性は低い。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	有り							【注意事項】 Webシステムで考慮すべき項目。

○:クラウドの対象と成り得る項目 △:クラウドの対象となる場合がある項目 -:通常クラウドの対象とならない項目 なお、本項目でクラウド調達に必要な項目を網

○:目標(値)として扱い、長期的に測定・評価を行うべき項目

Pxx:利用ガイドのマトリクス詳細説明ページ

利用ガイド及び調査報告書の用語集にて解説のあるIT専門用語

項番	大項目	中項目	メトリクス(指標)	メトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ²	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと						
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5					
A.1.3.1	可用性	継続性	RPO(目標復旧地点)(業務停止時)	業務停止を伴う障害が発生した際、バックアップしたデータなどから情報システムをどの時点まで復旧するかを定める目標値。 バックアップ頻度・バックアップ装置・ソフトウェア構成等を決定するために必要。	○	P35	3 → 2	1営業日 前の時点 (日次バックアップ からの復旧)	データの損失は許容できないため、障害発生時点までの復旧が原則。 システム障害時において、障害復旧完了後、バックアップデータを使用したリストアを行うことを想定。 [-] データの損失がある程度許容できる場合(復旧対象とするデータ(日次、週次)によりレベルを選定)	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	復旧不要	5営業日 前の時点 (週次バックアップからの復旧)	1営業日 前の時点 (日次バックアップからの復旧)	障害発生 時点 (日次バックアップ+ アーカイブからの復旧)							【注意事項】 RLOで業務の復旧までを指定している場合、業務再開のために必要なデータ整合性の確認(例えば、バックアップ時点まで戻ってしまったデータを手修正する等)は別途ユーザが実施する必要がある。
A.1.3.2	可用性	継続性	RTO(目標復旧時間)(業務停止時)	業務停止を伴う障害(主にハードウェア・ソフトウェア故障)が発生した際、復旧するまでに要する目標時間。 ハードウェア・ソフトウェア構成や保守体制を決定するために必要。	○	P35	3 → 2	12時間以内	窓口対応等、システム停止が及ぼす影響が大きい機能の復旧を優先しなるべく早く復旧する。故障時すみやかに利用可能な予備機を使用した復旧を想定。 [-] 業務停止の影響が小さい場合 [+] コストと地理的条件等の実現性を確認した上で、復旧時間を短縮したい場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	1営業日以上	1営業日以内	12時間以内	6時間以内	2時間以内						【注意事項】 RLOで業務の復旧までを指定している場合、業務再開のために必要なデータ整合性の確認(例えば、バックアップ時点まで戻ってしまったデータを手修正する等)は別途ユーザが実施する必要がある。
A.1.3.3	可用性	継続性	RLO(目標復旧レベル)(業務停止時)	業務停止を伴う障害が発生した際、どこまで復旧するかのレベル(特定システム機能・すべてのシステム機能)の目標値。 ハードウェア・ソフトウェア構成や保守体制を決定するために必要。	○	P36	2	全システム機能の復旧	すべての機能が稼働していないと影響がある場合を想定。 [-] 影響を切り離せる機能がある場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定しない	一部システム機能の復旧	全システム機能の復旧								【レベル1】 一部システム機能とは、特定の条件下で継続性が要求される機能などを指す。(例えば、住民基本台帳システムの住民票発行機能だけは、障害時も提供継続する場合等。)
A.1.4.1	可用性	継続性	システム再開目標(大規模災害時)	大規模災害が発生した際、どれ位で復旧させるかの目標。 大規模災害とは、火災や地震などの異常な自然現象、あるいは人為的な原因による大きな事故、破壊行為により生ずる被害のことを指し、情報システムに基大な被害が発生するか、電力などのライフラインの停止により、システムをそのまま現状に修復するのが困難な状態となる災害をいう。	○	P37	2	一ヶ月以内に再開	電源及びネットワークが利用できることを前提に、遠隔地に設置された予備機とバックアップデータを利用して復旧することを想定。機能は、業務が再開できる最低限の機能に限定する。 [+] 人命に影響を及ぼす、経済的な損失が基大など、安全性が求められる場合でベンダーと合意できる場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	再開不要	数ヶ月以内に再開	一ヶ月以内に再開	一週間以内に再開	3日以内に再開	1日以内に再開					【注意事項】 目標復旧レベルについては、業務停止時に規定されている目標復旧水準を参考とする。

項番	大項目	中項目	メトリクス (指標)	メトリクス説明	クラウド 調達時 の扱い ¹	利用ガ イドの 解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと		
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5	
A.1.5.1	可用性	継続性	稼働率	明示された利用条件の下で、情報システムが要求されたサービスを提供できる割合。明示された利用条件とは、運用スケジュールや、目標復旧水準により定義された業務が稼働している条件を指す。その稼働時間の中で、サービス中断が発生した時間により稼働率を求める。 一般的にサービス利用率と稼働率は比例関係にある。	○	P38	3	99.5%	ベンダーのサポート拠点から、車で2時間程度の場所にあることを想定。1回当たり6時間程度停止する故障を年間2回まで許容する。 [+]コストと地理的条件等の実現性を確認した上で、可用性を高めたい場合 [-]地理的条件から実現困難な場合。業務停止が許容できる場合。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定しない	95%	99%	99.5%	99.9%	99.99%	【レベル】稼働時間(バッチ処理等を含む運用時間)を平日のみ1日当たり12時間と想定した場合。 99.99%.....年間累計停止時間17分 99.9%.....年間累計停止時間2.9時間 99.5%.....年間累計停止時間14.5時間 99%.....年間累計停止時間29時間 95%.....年間累計停止時間145時間
B.1.1.1	性能・拡張性	業務処理量	ユーザ数	情報システムの利用者数。利用者は、庁内、庁外を問わず、情報システムを利用する人数を指す。 性能・拡張性を決めるための前提となる項目であると共にシステム環境を規定する項目でもある。また、パッケージソフトやミドルウェアのライセンス価格に影響することがある。	○		1	上限が決まっている	あらかじめ一定の上限値を設定する場合を想定。 基幹系システムの場合は、業務ごとに特定のユーザが使用することを想定。 [-]特定のユーザのみ使用することを合意できた場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	特定ユーザのみ	上限が決まっている	不特定多数のユーザが利用				
B.1.1.2	性能・拡張性	業務処理量	同時アクセス数	同時アクセス数とは、ある時点で情報システムにアクセスしているユーザ数のことである。パッケージソフトやミドルウェアのライセンス価格に影響することがある。	○		1	同時アクセスの上限が決まっている	情報システムに対してどのようなピークモデルを想定しているか確認する。 特定のユーザがアクセスすることを想定。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	特定利用者の限られたアクセスのみ	同時アクセスの上限が決まっている	不特定多数のアクセス有り				
B.1.1.3	性能・拡張性	業務処理量	データ量(項目・件数)	情報システムで扱うデータの件数及びデータ容量等。性能・拡張性を決めるための前提となる項目である。	○		0	すべてのデータ件数、データ量が明確である	要件定義時には明確にしておく必要がある。 [+]全部のデータ量が把握できていない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	すべてのデータ件数、データ量が明確である	主要なデータ件数、データ量が明確である					【レベル1】主要なデータ量とは、情報システムが保持するデータの中で、多くを占めるデータのことを言う。 例えば、住民基本台帳システムであれば住民データ・世帯データ・異動データ等がある。
B.1.1.4	性能・拡張性	業務処理量	オンラインリクエスト件数	単位時間ごとの業務処理件数。性能・拡張性を決めるための前提となる項目である。	○		0	処理ごとにリクエスト件数が明確である	要件定義時には明確にしておく必要がある。 [+]全部のオンラインリクエスト件数が把握できていない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	処理ごとにリクエスト件数が明確である	主な処理のリクエスト件数のみが明確である					【レベル1】主な処理とは情報システムが受け付けるオンラインリクエストの中で大部分を占めるものを言う。 例えば、住民情報システムの転入・転出処理などがある。
B.1.1.5	性能・拡張性	業務処理量	バッチ処理件数	バッチ処理により処理されるデータ件数。性能・拡張性を決めるための前提となる項目である。	○		0	処理単位ごとに処理件数が決まっている	要件定義時には明確にしておく必要がある。 [+]全部のバッチ処理件数が把握できていない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	処理単位ごとに処理件数が決まっている	主な処理の処理件数が決まっている					【注意事項】バッチ処理件数は単位時間を明らかにして確認する。 【レベル1】主な処理とは情報システムが実行するバッチ処理の中で大部分の時間を占める物をいう。 例えば、人事給与システムや料金計算システムの月次集計処理などがある。

項番	大項目	中項目	メトリクス (指標)	メトリクス説明	クラウド 調達時 の扱い ¹	利用ガ イドの 解説 ²	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと		
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5	
B.2.1.4	性能・拡張性	性能目標値	通常時オンラインレスポンスタイム	オンラインシステム利用時に要求されるレスポンス。 システム化する対象業務の特性を踏まえ、どの程度のレスポンスが必要かについて確認する。アクセスが集中するタイミングの特性や、障害時の運用を考慮し、通常時・アクセス集中時・縮退運転時ごとにレスポンスタイムを決める。具体的な数値は特定の機能またはシステム分類ごとに決めておくことが望ましい。(例: Webシステムの参照系/更新系/一覧系など)	○	P39	3	3秒以内	管理対象とする処理の中で、通常時の 照会機能 などの大量データを扱わない処理がおおむね目標値を達成できれば良いと想定。 [-] 遅くとも、処理出来れば良い場合。または代替手段がある場合 [+] 性能低下が、情報システムの評価低下につながる場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定しない	10秒以内	5秒以内	3秒以内	1秒以内	【注意事項】 すべての処理に適用するわけではなく、主な処理に適用されるものとする。測定方法、調達範囲外の条件(例えばネットワークの状態等)については、ベンダーと協議し詳細を整理する必要がある。 【レベル4】 1秒以内とした場合には、用意するハードウェアについて高コストなものを求める必要があるため、その必要性を十分に検討する必要がある。	
B.2.1.5	性能・拡張性	性能目標値	アクセス集中時のオンラインレスポンスタイム	オンラインシステム利用時に要求されるレスポンス。 システム化する対象業務の特性を踏まえ、どの程度のレスポンスが必要かについて確認する。アクセスが集中するタイミングの特性や、障害時の運用を考慮し、通常時・アクセス集中時・縮退運転時ごとにレスポンスタイムを決める。具体的な数値は特定の機能またはシステム分類ごとに決めておくことが望ましい。(例: Webシステムの参照系/更新系/一覧系など)	○	P40	2	5秒以内	管理対象とする処理の中で、ピーク時の 照会機能 などの大量データを扱わない処理がおおむね目標値を達成できれば良いと想定。 [-] 遅くとも、処理出来れば良い場合。または代替手段がある場合 [+] 性能低下が、情報システムの評価低下につながる場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定しない	10秒以内	5秒以内	3秒以内	1秒以内	【注意事項】 すべての処理に適用するわけではなく、主な処理に適用されるものとする。測定方法、アクセス集中時の条件については、ベンダーと協議し詳細を整理する必要がある。 【レベル4】 1秒以内とした場合には、用意するハードウェアについて高コストなものを求める必要があるため、その必要性を十分に検討する必要がある。	
B.2.2.1	性能・拡張性	性能目標値	通常時バッチレスポンス順守度合い	バッチシステム利用時に要求されるレスポンス。 システム化する対象業務の特性を踏まえ、どの程度のレスポンス(ターンアラウンドタイム)が必要かについて確認する。更に、アクセスが集中するタイミングの特性や、障害時の運用を考慮し、通常時(※)・ピーク時・縮退運転時ごとに順守度合いを決める。具体的な数値は特定の機能またはシステム分類ごとに決めておくことが望ましい。 (例: 日次処理/月次処理/年次処理など) ※「通常時」とは、運用保守期間のうち、繁忙期間(住基業務であれば転入・転出の多い年度末・年度当初、住民税業務であれば確定申告時期・当初課税時期等)及び想定量を超える処理が発生した期間を除いた期間をいう。	○		2	再実行の余裕が確保できる	管理対象とする処理の中で、通常時のバッチ処理を実行し、 エラーが発生するなどして処理結果が結果が不正の場合、再実行できる余裕があれば良いと想定。 [-] 再実行をしない場合または代替手段がある場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	順守度合いを定めない	所定の時間内に収まる	再実行の余裕が確保できる				
B.2.2.2	性能・拡張性	性能目標値	アクセス集中時のバッチレスポンス順守度合い	バッチシステム利用時に要求されるレスポンス。 システム化する対象業務の特性を踏まえ、どの程度のレスポンス(ターンアラウンドタイム)が必要かについて確認する。更に、アクセスが集中するタイミングの特性や、障害時の運用を考慮し、通常時・ピーク時・縮退運転時ごとに順守度合いを決める。具体的な数値は特定の機能またはシステム分類ごとに決めておくことが望ましい。 (例: 日次処理/月次処理/年次処理など)	○		2	再実行の余裕が確保できる	管理対象とする処理の中で、ピーク時のバッチ処理を実行し、エラーが発生するなどして処理結果が結果が不正の場合、再実行できる余裕があれば良いと想定。 ピーク時に余裕が無くなる場合にはサーバ増設や処理の分割などを考慮する必要がある。 [-] 再実行をしない場合または代替手段がある場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	順守度合いを定めない	所定の時間内に収まる	再実行の余裕が確保できる				
C.1.1.1	運用・保守性	通常運用	運用時間(平日)	業務主管部門等のエンドユーザが情報システムを主に利用する時間。(サーバを立ち上げている時間とは異なる。)	○	P40	1	定時内での利用(1日8時間程度利用)	主に、開庁時間内での利用を想定。 [-] 不定期に利用する情報システムの場合 [+] 定時外も頻繁に利用される場合、または24時間利用の場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定無し(不定期利用)	定時内での利用(1日8時間程度利用)	定時外も頻繁に利用(1日12時間程度利用)	24時間利用			【注意事項】 情報システムが稼働していないと業務運用に影響のある時間帯を示し、サーバを24時間立ち上げていても、それだけでは24時間無停止とは言わない。
C.1.1.2	運用・保守性	通常運用	運用時間(休日等)	土日/祝祭日や年末年始に業務主管部門等のエンドユーザが情報システムを主に利用する時間。(サーバを立ち上げている時間とは異なる。)	○	P40	0	規定無し(原則利用しない)	週末は原則利用しないことを想定。 休日の窓口開庁などがある場合は、定時外の利用となる。 [+] 休日出勤する職員の業務に必要なため、休日等も利用する場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	規定無し(原則利用しない)	定時内での利用(1日8時間程度利用)	定時外も頻繁に利用(1日12時間程度利用)	24時間利用			

項番	大項目	中項目	マトリクス(指標)	マトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと	
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5
C.1.2.5	運用・保守性	通常運用	バックアップ取得間隔	バックアップ取得間隔	○	P41	4	日次で取得 全体バックアップは週次で取得する。しかし、RPO要件である、1日前の状態に戻すためには、毎日差分バックアップを取得しなければならないことを想定。 [-] RPOの要件が[-]される場合 [+] RPOの要件が[+]される場合や、複数世代を確保してバックアップの可用性を高めたい場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	バックアップを取得しない	システム構成の変更など、任意のタイミング	月次で取得	週次で取得	日次で取得	同期バックアップ	
C.4.3.1	運用・保守性	運用環境	マニュアル準備レベル	運用のためのマニュアルの準備のレベル。	○		2	情報システムの通常運用と保守運用のマニュアルを提供する 緊急時にはユーザー側にて保守対応を実施することも想定し、リカバリ作業手順などを示した保守マニュアルも作成する。 [-] 保守作業はすべてベンダーに依頼するため、通常運用に必要なオペレーションのみを説明した運用マニュアルのみ作成する場合 [+] ユーザー独自の運用ルールを加味した特別な運用マニュアルを作成する場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	各製品標準のマニュアルを利用する	情報システムの通常運用のマニュアルを提供する	情報システムの通常運用のマニュアルを提供する	ユーザーのシステム運用ルールに基づくカスタマイズされたマニュアルを提供する			【レベル】 通常運用のマニュアルには、サーバ・端末等に対する通常時の運用(起動・停止等)にかかわる操作や機能についての説明が記載される。保守運用のマニュアルには、サーバ・端末等に対する保守作業(部品交換やデータ復旧手順等)にかかわる操作や機能についての説明が記載される。 障害発生時の一次対応に関する記述(系切り替え作業やログ収集作業等)は通常運用マニュアルに含まれる。バックアップからの復旧作業については保守マニュアルに含まれるものとする。
C.4.5.1	運用・保守性	運用環境	外部システムとの接続有無	情報システムの運用に影響する外部システムとの接続の有無に関する項目。	○		1	庁内の外部システムと接続する [-] データのやり取りを行う他システムが存在しない場合 [+] 庁外のシステムに接続して、データのやり取りを行う場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	外部システムと接続しない	庁内の外部システムと接続する	庁外の外部システムと接続する			【注意事項】 接続する場合には、そのインターフェース(接続ネットワーク・通信方式・データ形式等)について確認すること。	
C.5.2.2	運用・保守性	サポート体制	保守契約(ソフトウェア)の種類	保守が必要な対象ソフトウェアに対する保守契約の種類。	○		2	アップデート ソフトウェアが法改正等によりバージョンアップした場合に、アップデートする権利を含めることを想定。 [-] アップデート権を必要としない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	保守契約を行わない	問い合わせ対応	アップデート			【注意事項】 アップデート権の範囲については、事前にベンダーと協議しておくこと。 ライフサイクル期間中に、OSやミドルウェアのバージョンアップが必要となる場合は、バージョンアップ後の情報システムの動作保障等についてあらかじめベンダーと協議しておくこと。 インターネットに公開する外部システムの場合は、最新ブラウザへの対応等についてもあらかじめベンダーと協議しておくこと。	
D.1.1.2	移行性	移行時期	システム停止可能日時	移行作業計画から本稼働までのシステム停止可能日時。(例外発生時の切り戻し時間や事前バックアップの時間等も含むこと。)	○		4	利用の少ない時間帯(夜間など) 業務が比較的少ない時間帯にシステム停止が可能。 [-] 停止を増やす場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	制約無し(必要な期間の停止が可能)	5日以上	5日未満	1日(計画停止日を利用)	利用の少ない時間帯(夜間など)	移行のためのシステム停止不可	【注意事項】 情報システムによっては、システム停止可能な日や時間帯が連続して確保できない場合がある。(例えば、この日は1日、次の日は夜間のみ、その次の日は計画停止日で1日、などの場合。) その場合には、システム停止可能日とその時間帯を、それぞれ確認すること。 【レベル】 レベル0は情報システムの制約によらず、移行に必要な期間のシステム停止が可能なことを示す。レベル1以上は、システム停止に関わる(業務などの)制約が存在する上での、システム停止可能日時を示す。レベルが高くなるほど、移行によるシステム停止可能な日や時間帯など、移行計画に影響範囲が大きい制約が存在することを示している。
D.3.1.1	移行性	移行対象(機器)	設備・機器の移行内容	移行前の情報システムで使用していた設備において、新システムで新たな設備に入れ替え対象となる移行対象設備の内容。	○	P44	3	移行対象設備・機器のシステム全部を入れ替える 業務アプリケーションも含めた移行がある。 [-] 業務アプリケーション更改が無い場合 [+] 業務アプリケーションの更改程度が大きい場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	移行対象無し	移行対象設備・機器のハードウェアを入れ替える	移行対象設備・機器のハードウェアを入れ替える	移行対象設備・機器のシステム全部を入れ替える	移行対象設備・機器のシステム全部を入れ替えて、さらに統合化する	【レベル】 移行対象設備・機器が複数あり、移行内容が異なる場合には、それぞれ合意すること。	

項番	大項目	中項目	メトリクス (指標)	メトリクス説明	クラウド 調達時 の扱い ¹	利用ガイ ドの 解説 ²	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと		
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5	
D.4.1.1	移行性	移行対象 (データ)	移行データ量	旧システム上で移行の必要がある業務データの量(プログラム、移行データに含まれるPDFなどの電子帳票類を含む)。	○	P45	2	10TB未満 10TB(テラバイト)未満のデータを移行する必要がある。 [-] 1TB未満の場合 [+] 10TB以上の場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	移行対象無し	1TB未満	10TB未満	10TB以上			【注意事項】 データベースの使用量をそのまま使用すると、ログデータなど移行には必要のないデータも含まれる場合がある。	
D.5.1.1	移行性	移行計画	移行のユーザ/ベンダー作業分担	移行作業の作業分担。	○		1	ユーザとベンダーと共同で実施 移行結果の確認等、一部を自治体職員が実施する形態を想定。 [+] 移行データの確認を自治体が発行しない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	すべてユーザ	ユーザとベンダーと共同で実施	すべてベンダー				【注意事項】 最終的な移行結果の確認は、レベルに関係なくユーザが実施する。なお、ユーザデータを取り扱う際のセキュリティに関しては、ユーザとベンダーで取り交わしを行うことが望ましい。 【レベル1】 共同で移行作業を実施する場合、ユーザ/ベンダーの作業分担を規定すること。特に移行対象データに関しては、旧システムの移行対象データの調査、移行データの抽出/変換、本番システムへの導入/確認、等について、その作業分担を規定しておくこと。 【注意事項】 ベンダーに移行作業を分担する場合には、既存システムのベンダーと新規システムのベンダーの役割分担を検討する必要がある。	
F.1.1.1	システム環境・エコロジ	システム制約/前提条件	構築時の制約条件	構築時の制約となる庁内基準や法令、各地方自治体の条例などの制約が存在しているかの項目。 例) ・J-SOX法 ・ISO/IEC27000系 ・政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準 ・地方公共団体における情報セキュリティポリシーに関するガイドライン(総務省) ・FISC ・プライバシーマーク ・構築実装場所の制限など	○		1	制約有り(重要な制約のみ適用) 庁内規約などが存在する場合を想定。 [-] 法や条例の制約を受けない場合、もしくは業界などの標準や取り決めがない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	制約無し	制約有り(重要な制約のみ適用)	制約有り(すべての制約を適用)					【注意事項】 情報システムを開発する際に、機密情報や個人情報等を取り扱う場合がある。これらの情報が漏洩するリスクを軽減するために、プロジェクトでは、情報利用者の制限、入退室管理の実施、取り扱い情報の暗号化等の対策が施された開発用環境を整備する必要がある。また運用予定地での構築が出来ず、別地に環境設定作業場所を設けて構築作業を行った上で運用予定地に搬入しなければならない場合や、逆に運用予定地でなければ構築作業が出来ない場合なども制約条件となる。
F.1.2.1	システム環境・エコロジ	システム制約/前提条件	運用時の制約条件	運用時の制約となる庁内基準や法令、各地方自治体の条例などの制約が存在しているかの項目。 例) ・J-SOX法 ・ISO/IEC27000系 ・政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準 ・地方公共団体における情報セキュリティポリシーに関するガイドライン(総務省) ・プライバシーマーク ・リモートからの運用の可否など	○		1	制約有り(重要な制約のみ適用) 設置に関して何らかの制限が発生するセンターやマシンルームを前提として考慮。ただし条件の調整などが可能な場合を想定。 [+] 設置センターのポリシーや共同運用など運用に関する方式が制約となっている場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	制約無し	制約有り(重要な制約のみ適用)	制約有り(すべての制約を適用)					

○:クラウドの対象と成り得る項目 △:クラウドの対象となる場合がある項目 -:通常クラウドの対象とならない項目 なお、本項目でクラウド調達に必要な項目を網羅

○:目標(値)として扱い、長期的に測定・評価を行うべき項目

Pxx:利用ガイドのメトリクス詳細説明ページ

利用ガイド及び調査報告書の用語集にて解説のあるIT専門用語

項番	大項目	中項目	マトリクス(指標)	マトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと	
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5
A.3.1.1	可用性	災害対策	復旧方針	地震、水害、テロ、火災などの大規模災害時の業務継続性を満たすための代替の機器として、どこに何が必要かを定める。	○	P48	2	同一の構成で情報システムを再構築 [+] コストと実現性を確認した上で、可用性を高めたい場合	災害発生後に調達したハードウェア等を使用し、同一の構成で情報システムを再構築することを想定	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	復旧しない	限定された構成で情報システムを再構築	同一の構成で情報システムを再構築	限定された構成をDRサイトで構築	同一の構成をDRサイトで構築	【レベル】 レベル1及び3の限定された構成とは、復旧する目標に応じて必要となる構成(例えば、冗長化の構成は省くなど)を意味する。 【注意事項】 データセンター等の庁舎外にサーバを設置する場合は、庁舎がDRサイトの位置づけとなる場合もある。 DR(Disaster Recovery)サイトとは、災害などで業務の続行が不可能になった際に、緊急の代替拠点として使用する施設や設備のこと。
A.3.2.1	可用性	災害対策	保管場所分散度(外部保管データ)	地震、水害、テロ、火災などの大規模災害発生により被災した場合に備え、データ・プログラムを運用サイトと別の場所へ保管する。	○		2	1ヶ所(遠隔地) [+] コストと実現性を確認した上で、可用性を高めたい場合	遠隔地1ヶ所	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	外部保管しない	1ヶ所(近隣の別な建物)	1ヶ所(遠隔地)	2ヶ所(遠隔地)		【注意事項】 ここで遠隔地とは、サーバ等の設置場所から見ての遠隔地であり、庁舎等の利用場所から見ての遠隔地ではない。
A.3.2.2	可用性	災害対策	保管方法(外部保管データ)	地震、水害、テロ、火災などの大規模災害発生により被災した場合に備え、データ・プログラムを運用サイトと別の場所へ保管するための方法。	○	P49	0 → 1	同一システム設置場所内の別ストレージへのバックアップ [+] コストと実現性を確認した上で、可用性を高めたい場合	媒体による保管を想定。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	媒体による保管	同一システム設置場所内の別ストレージへのバックアップ	DRサイトへのリモートバックアップ			
C.1.2.3	運用・保守性	通常運用	データ復旧の対応範囲	データの損失等が発生したときに、どのような事象に対して対応する必要があるかを示す項目。	○	P50	1	障害発生時のデータ損失防止 [-] 障害時に発生したデータ損失を復旧する必要がない場合 [+] 職員の作業ミスなどによって発生したデータ損失についても回復できることを保証したい場合	障害発生時に決められた復旧時点(RPO)へデータを回復できれば良い。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	バックアップを取得しない	障害発生時のデータ損失防止	変更・削除したファイルの復旧 職員の入力作業ミスなどによって発生したデータ損失防止			【注意事項】 職員の入力ミス等を想定した変更・削除したファイルの復旧の場合、情報システムとしては正常に完了してしまった処理を元に戻さなければならないため、ファイルサーバ以外の情報システムでは実現できないと考えて良い。

項番	大項目	中項目	メトリクス(指標)	メトリクス説明	クラウド調達時の扱い ¹	利用ガイドの解説 ²	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと		
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4		5	
C.1.3.1	運用・保守性	通常運用	監視情報	情報システム全体、あるいはそれを構成するハードウェア・ソフトウェア(業務アプリケーションを含む)に対する監視に関する項目。監視とは情報収集を行った結果に応じて適切な宛先に発報することを意味する。本項目は、監視対象としてどのような情報を発信するべきかを決定することを目的としている。 セキュリティ監視については本項目には含まない。「E.7.1 不正監視」で別途検討すること。	○	P51	3	エラー監視(トレース情報を含む)を行う [-] 障害時は管理者がすぐに情報システムにアクセスできるため、詳細なエラー情報まで監視する必要がない場合 [+] エラー情報だけでなく、リソース使用状況も監視して、障害発生を未然に防ぎたい場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	監視を行わない	死活監視を行う	エラー監視を行う	エラー監視(トレース情報を含む)を行う	リソース監視を行う	パフォーマンス監視を行う	【レベル】 死活監視とは、対象のステータスがオンラインの状態にあるかオフラインの状態にあるかを判断する監視のこと。 エラー監視とは、対象が出力するログ等にエラー出力が含まれているかどうかを判断する監視のこと。トレース情報を含む場合は、どのモジュールでエラーが発生しているのか詳細についても判断することができる。 リソース監視とは、対象が出力するログや別途収集するパフォーマンス情報に基づいてCPUやメモリ、ディスク、ネットワーク帯域といったリソースの使用状況を判断する監視のこと。 パフォーマンス監視とは、対象が出力するログや別途収集するパフォーマンス情報に基づいて、業務アプリケーションやディスクの入出力、ネットワーク転送等の応答時間やスループットについて判断する監視のこと。 【運用コストへの影響】 エラー監視やリソース監視、パフォーマンス監視を行うことにより、障害原因の追求が容易となったり、障害を未然に防止できるなど、情報システムの品質を維持するための運用コストが下がる。	
C.5.9.1	運用・保守性	サポート体制	定期報告会実施頻度	保守に関する定期報告会の開催の要否。	○		3	四半期に1回 [-] 報告の必要が無い場合。 [+] 運用業務委託をしている場合や、SLAを設定している場合、必要に応じて。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	年1回	半年に1回	四半期に1回	月1回	週1回以上	【注意事項】 障害発生時に実施される不定期の報告会は含まない。	
C.5.9.2	運用・保守性	サポート体制	報告内容のレベル	定期報告会において報告する内容の詳しさを定める項目。	○		1	障害報告のみ [+] 運用業務委託をしている場合や、SLAを設定している場合、必要に応じて。	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	障害報告のみ	障害報告に加えて運用状況報告を行う	障害及び運用状況報告に加えて、改善提案を行う				
C.6.2.1	運用・保守性	その他の運用管理方針	問い合わせ対応窓口の設置有無	ユーザの問い合わせに対して単一の窓口機能を提供するかどうかに関する項目。	○	P52	1	ベンダーの既設コールセンターを利用する [-] 問い合わせ対応窓口設置しない場合 [+] 常駐するベンダー作業員が問い合わせ対応窓口となる場合等	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	問い合わせ対応窓口の設置について規定しない	ベンダーの既設コールセンターを利用する	ベンダーの常駐等専用窓口を設ける				【注意事項】 ここでは、ユーザとベンダー間における問い合わせ窓口の設置の有無について確認する。問い合わせ対応窓口機能の具体的な実現方法については、別途に具体化する必要がある。	
D.1.1.1	移行性	移行時期	システム移行期間	移行作業計画開始から本稼働までのシステム移行期間。	○		4	2年未満 年度を跨いで移行を進める必要がある。 [-] 期間短縮の場合 [+] さらに長期期間が必要な場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	システム移行無し	3ヶ月未満	半年未満	1年未満	2年未満	2年以上		
D.1.1.3	移行性	移行時期	並行稼働の有無	移行作業計画から本稼働までのシステムの並行稼働の有無。	○		1	有り 移行のためのシステム停止期間が少ないため、移行時のリスクを考慮して並行稼働は必要。 [-] 移行のためのシステム停止期間が確保可能であり、並行稼働しない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	無し	有り					【レベル1】 並行稼働有りの場合には、その期間、方法場所等を規定すること。	
E.3.1.2	セキュリティ	セキュリティ診断	Web診断実施の有無	Web診断とは、Webサイトに対して行うWebサーバやWebアプリケーションに対するセキュリティ診断のこと。	○		1	実施 内部ネットワーク経由での攻撃に対する脅威が発生する可能性があるため対策を講じておく必要がある。 [-] 内部犯を想定する必要がない場合、Webアプリケーションを用いない場合	仕様の対象としない	ベンダーによる提案事項	不要	実施					【注意事項】 詳細は、当センターの「地方公共団体における情報システムセキュリティ要求仕様モデルプラン」を参照の上、対策を検討すること。	

項番	大項目	中項目	メトリクス (指標)	メトリクス説明	クラウド 調達時 の扱い ¹	利用ガ イドの 解説 ³	グループ②		レベル							備考 [利用ガイド]第4章も参照のこと
							選択レベル	選択時の条件	-	*	0	1	2	3	4	

○:クラウドの対象と成り得る項目 △:クラウドの対象となる場合がある項目 -:通常クラウドの対象とならない項目 なお、本項目でクラウド調達に必要な項目を網羅し

○:目標(値)として扱い、長期的に測定・評価を行うべき項目

Pxx:利用ガイドのメトリクス詳細説明ページ

利用ガイド及び調査報告書の用語集にて解説のあるIT専門用語